



Title	源氏物語〈二層〉構造論：物語構造と人物造型の論理
Author(s)	中井，賢一
Citation	大阪大学，2008，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49121
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	なか い けん いち 中 井 賢 一
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 1 6 8 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	源氏物語〈二層〉構造論－物語構造と人物造型の論理－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 荒 木 浩 (副査) 教 授 飯 倉 洋 一 准教授 加 藤 洋 介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、〈二層〉をキーワードに、『源氏物語』の物語展開の論理や仕組みを、物語構造と人物造型に即して分析し、この作品の第三部を中心に、新しい読みを提示しようとする、400字詰め原稿用紙にしておよそ 680 枚程度の論文である。

論文は、第一章「物語構造の論理－物語の〈二層〉構造－」と、第二章「人物造型の論理－物語の〈逆接的〉表現－」の二部から構成される。

第一章は、光源氏の長子である夕霧に注目し、この作品の「二層」構造を剔抉し、物語の全体構造を再読しようとする。申請者は、匂宮巻冒頭の一節で、光源氏亡き後、彼の後継者としてあげられる冷泉・匂宮・薫のなかに、夕霧の名前が「不在」であることに逆説的に留意し、そのことはむしろ夕霧と光源氏とが、相容れない二つの「層」をなして物語を領導する物語の論理の証であると着目することから出発する。

第一節では、従来、光源氏の子として夕霧が、その絶対的な下位者であると読み取られることが常であったことを逆転し、夕霧の権力体制が光源氏のそれとは「対照的な〈一対〉」であることを示す。その権力体制は両者とも相似的な「恋と栄華」の連関によって成立するものであるが、光源氏の場合はそのいずれもが中絶し、結局、藤壺との「罪の恋と栄華」の連関によって成立する。「罪」に縛られない夕霧の盤石な「恋と栄華」と、光源氏のそれとは、光と翳の一対として存在することになると指摘し、夕霧が光源氏とともに対極的にこの物語を支えている、という構造を明らかにする。第二節では、光源氏に対してなされた予言のうち、夕霧が太政大臣になる、ということのみが実現されないことに着目し、史実に於ける太政大臣の名誉職性を踏まえて、『源氏物語』第三部が〈夕霧権力体制〉対〈薫・匂宮・冷泉連携体制〉という対峙の構図をなしている、と看破した上で、匂宮と宇治中君との間に若宮が誕生したことで夕霧の権力態勢に揺らぎが生じ、その弱体化のゆえに、夕霧は執政権を手放すことができず、いわば安泰の内に太政大臣として引退することができなかったと論じていく。第三節では、『源氏』第三部における政治的人間関係の系図が動かず、上記の〈二層〉構造が堅持されていると考える申請者が、夕霧が雲居雁と落葉宮に十五日ずつ通うという、やや滑稽な描写とも見られていた部分に政治的意義を見出し、〈二層構造〉との関わりを論じ、浮舟の機能にも注目して、浮舟は薫と匂宮の両者を都の系図から切り離す役割を演じると考えることで、物語第三部の〈二層〉対峙には「光源氏権力体制」対〈夕霧権力体制〉という構図が潜在していると読む。この時点で夕霧の妻の雲居雁と落葉宮の娘達にはいまだ御子が生まれていない。両者に等分に通う夕霧の行為は、国母の母となる可能性を有する二人を対等に扱う政治的な配慮であり、そうした行為こそ、「罪の恋と栄華」が連関することが必然的な光源氏体制とは

対照的に、「恋と栄華」とが連続する夕霧世界を浮かび上がらせるとする。第四節では、第一部の完結篇である藤裏葉巻末における柏木不在の意義を明らかにし、柏木と弁少将の、光源氏と夕霧に対する両義的機能を論じることで、夕霧対弁少将という対立の構図が、賢木巻や澤標巻から構造的枠組みとして仕組まれていると論じ、その過程で、夕霧と柏木とを相比的に捉える従来の見解に疑義を呈する。第五節では、『源氏物語』に「都の「栄華」の力」と「宇治の「反栄華」の力」の対峙があると読み、前者には〈二層〉の対立があるとみて、それぞれに「明暗〈一对〉」の構造が織り込まれていると考え、政治性を顕在させない宇治十帖に、実は政治と密接に関連する大きなエネルギーが潜在するとその物語性を読解する。

第二章「人物造型の論理―物語の〈逆接的〉表現―」では、第一章で述べた物語構造に沿って、その作中人物の形態と表現を分析する。

第一節では、光源氏復活の重要な契機である絵合巻の絵合の中心的意義とは、光源氏が冷泉のために尽力し、そして冷泉と藤壺との連携を図ろうとすることにあるとし、通説とは異なり、権中納言は直接的な標的ではなく、だからこそ逆に権中納言に対する優位性を発揮するという逆説構造を指摘する。第二節では、光源氏が夕霧を大学に入れ、六位から出発させるという厳しい処遇に着目し、それは単なる教育的配慮ではなく、物語の中で光源氏と夕霧との位置を分断することとなり、光源氏の配慮が、彼と夕霧とを対照的で対峙的な位置に切り離すという、逆説的な力として働いている、と指摘する。第三節では、薫に対する無敬語表現に注目し、他とは異なり、大君との関係においてのみ、好意的な無敬語表現が用いられている、として、そのことで本来は身分や境遇において大きな懸隔のある女君と薫とが対等な心的交流を成立させることになり、薫の美質を、逆説的に浮かび上がらせる構造を示す、と論じる。第四節では、受動的な位置づけで読み取られることが多い浮舟だが、実は宿木巻時点より状況を的確に捉えその悲劇的状况に対し自らの意志で対処する「主導的」な力を有する人物として造型されていたと指摘し、受動性と主導性という、本来齟齬しかねないイメージを回避するために、自死までの浮舟像は、薫など一部の人間の目を通して描かれるという。そのことで、本来潜在していた「主導性」に光が当たらないように仕組み、浮舟の「主導性」の強さを際立たせる逆説的表現方法が仕組まれていると読む。

論文審査の結果の要旨

論文だけでも年間 100 本を優に超える汗牛充棟の『源氏物語』研究の中で、その作品世界を読み解き、独自の作品論を展開することは、独創的な構想力と、また膨大な研究史と対峙して、それらを読み解き咀嚼して、自らの論文構成の中に位置づける、厳しい作業が必要である。申請者は、本論文に於いて、『源氏物語』の第三部世界に中心的素材を取り、本来は父光源氏の影に隠れたネガティブな存在であった夕霧の意義に着目し、その形象の物語に於ける本質的重要性を発見し、『源氏物語』に〈二層〉構造があることを読み解こうとする。その独自の論点は、硬直しがちな『源氏物語』研究に活性化を促すものとして注目される。

申請者のキーワードは〈二層〉であり、〈逆説〉であり、〈不在〉であるが、その逆説的・反語的思考は、光源氏の政治性を剔抉し、政治的であろうとしないことで逆にその政治性を強めるという仕組みを読み解く。「恋と栄華」を相似的に表現しながら、実はネガティブな夕霧こそより政治的に強固な位置にある、と論じることでその〈二層〉性を剔抉する申請者は、はからずも「罪の恋と栄華」のディレンマの中で危うい栄華を体現する光源氏の魅力を、夕霧を照射することで明らかにしている、とも言えるのである。

一方で申請者の逆説的思考は、一種の裏読みであり、また「不在性」「逆説」「無」という否定的思考を基本とするために、無いものを論じて作品論に及ぼす、という危うさを内包することになる。また作品論理を追い求める余り、図式的解決に過ぎる部分が見られたり、「物語」という概念に過剰な性格付与をして、擬人的にその物語性を論じるなど、論述の中に恣意的な部分が含まれることもある。

このような瑕疵はあるものの、通説の常識を疑い、新たな作品構造を解読しようとする申請者の姿勢は意欲的かつ精神的であり、本論文のとりあつかった問題提起については、今後、学会に於いて活発な議論が行われるべきものであり、『源氏物語』再読の契機と可能性を孕んだものであると見なすことができる。また申請者には旺盛な筆力があり、今後の計画として『源氏物語』第一部さらに作品総体を視野に入れた研究論文や構想もすでに内包している。そうした今後の展開をも期待しつつ、本論文は博士（文学）の学位に相応しいものであると認定する。